

芸者衆の姿は消える。 しかし追分だけは なんとか残さねば。

Mitsuru Aosaka



ウミネコはクンニャークンニャーと鳴く。オオセグロカモメはウンガララーウンガララーと鳴く。ニシンを追って「春がきた～、春がきた～」って、すごい勢いで鳴いた。「そんな時代、ちょっと見てみたい気がするね」と、青坂師匠

者もいる。大陸から多くの渡来人がやつてきた歴史もあり、モンゴルの丘陵と日本の海の波の音が重なる

と、またひとつロマンが広がる。追分と謙良節を合わせて、独特の音調を持つ江差追分を誕生させたのは、寛政時代に盛岡から渡ってきた琵琶の名手、座頭佐之市だと伝えられている。

「追分はね、ソーラン節や沖揚げ音頭と違って、花街の芸者が唄い広めたもの。船頭衆が芸者遊びをしながら唄ったものも多く、艶っぽい意味が隠された歌詞もあるんですよ。千鳥なんて夜は飛ばないでしょ。あれは女性なの」と、師匠は悪戯っぽく笑う。

花街で唄われていた頃は、追分が十人十色でもよかった。やがてニシンがとれなくなると芸者衆の姿は消える。追分だけは、なんとか残したい。しかし、一般に普及するためには、曲節の基準を定める必要がある。こうして1909(明治42)年、正調江差追分が決められた。

わずか27文字の唄を 5、6年かけて覚える

松前江差の鴈の島は
地から生えたか浮島か

忍路(オシロ)高島およびもないが
せて歌棄(ウタスツ)磯谷まで

本唄には「かもめの鳴く音に」の他に、北前船の帆柱が波に揺れるよ
うすを唄ったものや、ニシン漁に出る
男たちとの別れを切なく唄ったもの
がある。「七節七声」といつて、切らず
に「息で唄わなければならぬ。たっ
た27文字をう分30〜40秒かけて、じっ
くり情緒を出して唄う。「流行歌が
どんどん出ている時代でしょ。江差
追分は5、6年かけて、二つしか覚え
られないんだから。それはゆるくな
いですよ」。想像以上に忍耐の唄で
ある。それでも追分を習いたい一心で、
九州や四国からも江差へやってくる。
毎年開催される全国大会の出場者
は400人。江差追分会の支部は、
ブラジルやサンフランシスコなど海外
にも広がり、会員数は4023人。

これだけの人をひきつける江差
追分の魅力はどこにあるのか。「そ
れは、メロディだね。困ったときも、
怒ったときも、心を休ませてくれ
る。喜怒哀楽の中に追分はある。
その人が背負ってきた人生が唄に
出るでしょ。唄うことで自分が慰
められるんですよ。涙を流して、明
日の糧にする」。そう答えた師匠
の背中には、言葉にできない哀しみ

を背負っているような気がした。

時代の流れとともに、江差追分
が変わっていくことを誰も止めるこ
とはできない。昔の唄のイメージを
知る人も残り少ない。「唄も食べ物
と同じ。終戦後に配給されて初め
て飲んだバイナップルジュースのあ
の味。何でも手に入る今の人に伝え
ることは難しい」。それでも師匠は
あきらめない。この世に情緒がある
かぎり、昔の唄をそのまま伝えてい
くことの意義を信じている。



姥神大神宮渡御祭と江差追分

姥神大神宮渡御祭の起源は360
年前にさかのぼる。その年のニシン
の豊漁に感謝を込めて行われた古
くからの祭り、現在も毎年8月9
日から11日、または祭り一色になる。
江差追分は中山道の馬子唄をルー
ツに、北国の厳しい風土にもまれな
がら、多くの先達に唄い継がれてき
た。日本国内だけでなく、海外にも
多くの愛好者を持つ。いずれも、は
るか遠い江差のニシン景気を今に伝
える貴重な文化である。